

Vテモラッテハ困ルについての一考察：
非受益のテモラウと受身の関係を中心にして

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊井, 浩子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008113

Vテモラッテハ困ルについての一考察

—非受益のテモラウと受身の関係を中心にして—

熊 井 浩 子

【要 旨】

本稿では、非受益を表すテモラウを用いたVテモラッテハ困ルとVラレテハ困ルの意味や機能の違いを、用いられる動詞の自己制御性や言語的環境、困ル主体と動作主の性質等の観点から分析した。その結果、モラウ系は、認識を表す動詞や自己制御性のある動詞とともに用いられ、相手の認識に対する批判や、コントロールしようとすればできる事態に対し、正しくコントロールしようとしないことに対する非難や抑止を表す場合が多いことが明らかになった。一方受身は、間接受身が多く用いられ、コントロールできない事態に対するマイナスの感情を表現する、働きかけ性を持たない用法が多数見られた。また、テモラウには、迷惑感を和らげる待遇的な配慮に加え、次に述べることについての前置きとして用いられる機能、一方受身には過去の事態に関する反実仮想の用法が観察された。さらに、テモラウを伴わない困ル自体に相手に対する非難や抑止の機能があり、それがテモラウと親和性が高い理由であることも明らかになった。一方、受身は困ル以外のマイナス表現とも用いられることから、テモラウに比べて働きかけ性への移行はまだ進んでいないことがわかった。

【キーワード】 テモラウ 受身 非受益 働きかけ 困ル

1. はじめに

補助動詞テモラウは、AハBニVテモラウの形で、通常、Bの行為によってAがなんらかの利益・恩恵を受けることを表す。その中には、(1)のようにAのBに対する働きかけがある場合と(2)のように働きかけがない場合があることが知られているが、結果としてAの受益を表す点では共通で、利益の授受に関し、(3)のようないわゆる迷惑の受身と対立的な関係にあるとされる。

- (1) 母に頼んで部屋に来てもらった。
- (2) いいときに母に部屋に来てもらって助かった。
- (3) 突然母に部屋に來られて困った。

その一方で、テモラウには受益を表さない(4)のような用法もある。

- (4) 突然部屋に来てもらっては困る。

これらの非恩恵型テモラウの中には、(5)のように受身(6)と置き換え可能なものも

多い。

(5) 忘れてもらっては困る。

(6) 忘れられては困る。

しかし、非受益を表すテモラウと受身にはどのような意味や機能の違いがあり、それぞれの選択に話し手のどのような意図が込められているのかについては、必ずしも明確ではない^{注1}。

そこで、本稿では、非受益のテモラウのうち、Vテモラッテハ困ルを中心に、テハ+マイナスの感情・評価の形式で用いられるテモラウと受身の意味や機能にどのような差異があるのかを明らかにしていきたいと思う。同時に、困ルについても取り上げ、なぜ非受益のテモラウがマイナスの感情を表す表現の中でも特に困ルとともに用いられる場合が多いのかについても考察する。

2. 非恩恵を表すテモラウ

許(2000)は、非依頼のテモラウ文^{注2}は、依頼テモラウ文よりも客体の名詞句に関する制限がやや緩く、客体の名詞句が無生物や自然現象である場合でも成立可能であること、第三者が行った、主語である話し手の望んでいない動作の結果を自分自身に向けさせ、間接的な影響を受けたこととして表現する形式であることなどを挙げ、(7)(8)のように、非依頼テモラウ文と間接受身文が非常に類似した性質を持っていると指摘している。そして、このような非依頼のテモラウは文末に話し手の不愉快な気持ちを含む表現が使われやすいと述べている。(9)と(10)、(11)と(12)はその例である。

(7) 定刻に来るはずのバスに20分も遅れてきてもらっちゃ困る。(例文・下線は許)

(8) 定刻に来るはずのバスに20分も遅れてこれちゃ困る。(同上)

(9) 私は彼に何回も謝ってもらってどう反応していいか分からなかった。(同上)

(10) 私は彼に何回も謝られてどう反応していいか分からなかった。(同上)

(11) 何の連絡もなく勝手に会社を休んでもらっちゃ困るよ。(同上)

(12) 何の連絡もなく勝手に会社を休まれちゃ困るよ。(同上)

その一方で、両者には事柄に関する話し手の受け方の微妙なニュアンスの違いがあり、それが、両者の語用論的な違いにつながっていると考察する。即ち、非依頼のテモラウ文が、第三者が行った動作をあたかも自分に向けられたかのように表現することによって、話し手が直接的な影響を受けたことを表す積極的な表現であるのに対し、間接受身文は、第三者が行った動作に対しては積極的に関与していないが、その動作の結果として間接的に影響を受けたことを表す、消極的な表現であるとしている。そして、構文的には(10)のような直接受身に対応する(9)だけでなく、(12)のような間接受身に対応する(11)であっても、意味的な面においては直接受身文に近い性質を持っていると述べている。ただし、「意味的には直接受身に近い積極的な表現」である非依頼テモラウと「消極的な表現」

である間接受身にどのような語用論的な違いがあるのかについては触れられていない。

また、日常生活において、間接受身の使用頻度が非常に低い一方で、テモラウ文が頻繁に用いられると述べ、その理由については、テモラウ文が自・他動詞の区別とあまり関係なく成立するのに対し、受身文では自動詞は間接受身文しか成立しないというように、テモラウ文が受身文より制限が少ないという述語動詞の制約に加え、動作が話し手に向けられることによって話し手が当事者として出来事に関わることを表すテモラウ文のほうが、ハタの観点から述べる間接受身よりも「述べやすい」ためであると考察する。しかし、間接受身文の使用頻度が低いというのは事実であろうか。また、この構文では、間接受身に限らず、(13)のような直接受身も用いることができる。しかも、非受益のテモラウ文が意味的に直接受身文に近いとすると、直接受身である(13)と(14)の違いがわからなくなる。

(13) 何回も謝られても困る。

(14) 何回も謝ってもらっても困る。

さらに、許は、阪倉(1975)が可能動詞や非情物の静的な状態を言う動詞については受身文が成り立たないが、テモラウによる表現も全く同様であるとしていてことを受け、依頼テモラウ文には意志動詞が、非依頼テモラウには(15)のように無意志動詞が用いられやすいと述べている。

(15) 今日のような大事な試合を負けてもらっちゃ今年は優勝できないよ。(例文、下線は許)

阪倉の言う受身に使われない動詞というのはいわゆる三上(1972)の所動詞であり、非情・静的な状態動詞、性状動詞で、「ある、見える、聞こえる、(においが、音が)する、要る、似合う、できる」や「飲める、読める、食べられる」などの可能の表現がこれにあたる。確かに受益を表すテモラウについても所動詞が使われにくい点は、阪倉・許の指摘する通りであるが、非受益テモラウで用いられる動詞の制限は受益テモラウに比べると緩やかなのではないかと予想される。また、非依頼テモラウには無意志動詞が用いられやすいというのは事実であろうか。上の(9)(11)は、許自身が挙げている例であるが、謝ル・休ムのような意志動詞も普通に用いられていることがわかる。

このように、許は、非依頼、特に恩恵を表さないテモラウと間接受身の共通点を明らかにしたという点で評価できるが、両者の差異や、このような構文で用いられる動詞の性質についてはまだまだ検討の余地が残ると思われる。

テアゲルやテクレルなども含めたいいわゆる恩恵表現をベネファクティブと総称し、その包括的研究の中で非恩恵型のテモラウについて詳細に考察しているのが、山田(1999)・(2001)である。まず、山田(1999)では、非恩恵型テモラウ文は、出現範囲がテハ節複文の前件など、非常に限られているが、その範囲においては動作者位置に非情物を取りうる点も合わせて、間接受身とほぼ同一の用法であるとする。ここでの非恩恵型テモラウと

間接受身との類似性については、許の指摘と一致する。

また山田（2001）は、山田（1999）の考察を発展させ、これらの非受益テモラウは、①文末に現れることはなく、テハなどの接続助詞を伴って現れ、後件に「困る」などの話し手の感情を表す表現などが来る、及び、②複文の主語の異同に関し、前件と後件の主語が同じでなければならない、という2つの特徴を指摘している。さらに山田（2001）は、この非恩恵型テモラウを、（16）のように後件に困ルなどの話し手の感情表出表現が来る「感情表出タイプ」と、（17）のようにイケナイ、ナラナイ、ダメダ等の表現が用いられる禁止など、否定の働きかけを表す当為判断のモダリティ形式に移行した「働きかけタイプ」とに分けている。

（16）問題を忘れてもらっては困る（例文は山田，2001）

（17）しかし、間違ってもらってはいけない（同上）

この感情表出タイプは、多くの場合、事実として既に出来た事態、または、今までの成り行きから、まさに今、目の前に存在しかかっている既存の事実と話し手が認識している事態を契機として自らの感情を表現した現場依存性の高い表現が基本であり、（18）（19）のように過去や他の人称を主語にして用いることはできないとされる。

（18）？あんなふうに誤解してもらっては、困っただろうよ。（例文は山田，2001）

（19）？そんなふうに誤解してもらっては、田中だって困るだろう。（同上）

そして、非恩恵的テモラウにこのような性質があるのは、テモラウ文が、談話全体に一貫する話し手を中心とした視点の層に属する形式であり、常に話し手を中心とした表現となることが要求されているためであると考察する。一方、主語と斜格名詞句の意味役割を交代させる機能を持つ受身は、このような視点制約から解放されているとする。即ち、山田（2001）によれば、受身は現場性・話し手中心性という制約を持たず、それ故、（20）（21）のように、過去や他の人称を主語とすることも可能であるということになる。しかし、そのような過去や第三者主体の受身文の意味・機能については言及されていない。

（20）あんなふうに誤解されては、困っただろうよ。（例文は山田，2001）

（21）そんなふうに誤解されては、田中だって困るだろう。（同上）

また、書き言葉では（22）のように文法上の困ルの主体は「私」であるが、意図する意味は、「一般的に見て」という意味を内包し、感情の起因となる前件が未来の事態である場合もあるとされる。このようなテモラウは、話し手の存在する時空を離れるため、聞き手以外の第三者が動作主になることも多く、それ故動作主を表す必要性が高くなり、その動作主はモで取り立てられたり、（23）のように、カラ格やガ格で表せたりするという。そして、このように動作主がガ格で表されるということは、既にテモラウが受益表現本来の枠組みをとっていないことを意味し、テモラッテハ困ル全体で話し手の感情を表す表現へ

と移行していることを示していると考察している。

(22) 異常に暴騰した地価が高値で安定したからといって「緊急対策が功を奏した」
と思ってもらっては困る。(例文は山田, 2001)

(23) (前略) そんな裏表のある奴から、氷水でも奢ってもらっちゃ、おれの顔に関わる。
(同上、下線も山田, 2001)

さらに、もともとの非恩恵型テモラウは動作主への働きかけを有さず、感情の表現として聞き手への非難を表すが、その動作・行為が未実現であれば、それを抑止することを意図した表現とも受け取られ、その意味で、聞き手に対する働きかけの表現に移行しやすいとする。一方、話し言葉で多く用いられる非受益テモラウが現場性・話し手中心性を持った表現であるのに対し、書き言葉では、その現場性・話し手中心性という制約が緩やかになるとされるが、そうであるならば、このような書き言葉のテモラウと受身の違いが不明確になってくる。テモラウや受身で用いられる動詞の性質や用いられる環境、機能などについて詳しく考察する必要があることがわかる。

3. 実際の用例の中のVラレテハとVテモラッテハ

本節では、書き言葉コーパス「少納言」^{注3}を用いてVテモラッテハ困ルとVラレテハ困ルを検索し^{注4}、①使用頻度、②Vラレルの場合には、受身の種類、③テモラウ・(ラ)レルに先立つ動詞の性質と言語的環境、④動作主の性質(動作主が聞き手か否か、動作主が非情物か否か)、⑤困ルがタ形や第三者を主体として用いられているか否か、⑥機能・用法、また併せて⑦困ル以外のどのようなマイナス評価の表現とともに用いられているか、という7つの観点から両者の差異について考察する。困ルについては名大会話コーパス^{注5}及び適宜インターネットやドラマ等の用例も利用する^{注6}。

なお、本稿では、Vテモラッテハ+困ルやそのバリエーションで用いられる非受益のテモラッテハを以下、モラウ系、Vラレテハ+困ルやそのバリエーションで用いられる受身を以下、ラレル系と仮称することにする。

「少納言」は書き言葉コーパスではあるが、小説等の台詞部分の用例もある。また、名大会話コーパスは用例が非常に少なかった。そのため、純粋な話し言葉とそれ以外を区別していないという制約があることはお断りしておく。

① 使用頻度

まず、使用頻度に関しては、「少納言」でVテモラッテハ困ルの用例は73例、Vラレテハ困ルの用例は132例あった。また、名大会話コーパスではモラウ系・ラレル系ともに(24)(25)のようにそれぞれ1件と、どちらも用例が少なかった。合計すると、それぞれ74件、133件となり、この構文に関しては、モラウ系よりもラレル系の使用頻度が高かった。

(24) 勝手に勝手に、ちょっとわかってもらっちゃ困るよ †

(25) だから Sさんなんかこちらの手駒を使われちゃ困るから †

表1. 使用頻度

	テモラッテハ困ル	ラレテハ困ル
少納言	73	132
名大会話コーパス	1	1
計	74	133

② 受身の種類

ラレル系のうち、直接受身は20件、いわゆる持ち主の受身は19件、残りの94件は間接受身であった。このことから、テモラウが間接受身よりも多く用いられるという許の指摘は、少なくともテハ困ルの形にはあてはまらないことがわかる。また直接受身であっても、他動性の高い動詞は邪魔スルなど3例のみで、あとは、真似ルや見ルなど、他動性の低い動詞で、受身にすると迷惑性が生ずるタイプであった。持ち主の受身についても、秘密ヲ握ルや保険ヲ解約スルのようなタイプが大半を占めており、その行為を持ち主自身が直接受ける度合いが高い、いわゆるXがYニZヲVラレルのZヲを省略してXがYニにしても意味が変わらないようなタイプ^{注7}のものは1つもなかった。それ故、こちらも間接受身に近い性質のものであることがわかる。

直接受身と持ち主の受身・間接受身は連続性を持ち、動詞の自他だけでは機械的に分類できないが、いずれにしても、133例の大半が間接受身または間接受身に近い受身であったことは注目に値する。つまり、直接自分に向けられたのではない事態を、自分と何らかの関係があるものとして位置づけ、その事態から間接的にマイナスの影響を受けることを表す表現が多く使われているということである。このような間接受身は能動文にはない迷惑性を帯びるが、そのような迷惑性から生まれる不快感が困ルなどのマイナス感情・評価と結び付きやすい理由ではないかと思われる。

③ 動詞の性質や言語的環境

動詞の性質については、意味や、自己制御性について見ていく。まず、モラウ系74例の動詞の異なり数は39^{注8}であったが、このうち頻度が高かったのは、順に、忘レル（10）、言ウ（9）、間違エル／間違ウ（5）、ヤル／スル^{注9}（4）、誤解スル・舐メル（各3）であった。言ウやスル／ヤルについては、この形に限らず、動詞自体の使用頻度が高い可能性もあるが、忘レル、間違エル／間違ウ、誤解スル、舐メルなどが多く用いられていることは注目に値する。

間違エル／間違ウについては、誤解スル・舐メル、甘ク見ル・～ト思ウ、とワカル・～ト受ケトル・錯覚スル・馬鹿ニスル・～ト一緒ニスル・～ト言ウ^{注10}と合わせると21件となり、何らかの意味で話し手が事実あるいは望ましいと考える捉え方と違っていることを表す動詞であることがわかる。また、舐メル、甘ク見ル、気ヲ抜ク・馬鹿ニスルは、何かを軽視する・過小評価するということを表す動詞である。忘レルも心に留めておかないという意味でこれと重なる。このように、モラウ系は、(26)のように、相手の誤解や思い違い、認識の甘さを指摘し、それを非難したり、制止したりする場合に用いられている場

合が非常に多いことがわかる。本稿ではこれらの動詞を合わせて認識系と仮称することにする。

(26) そう馬鹿にしてもらっては困る。†

自己制御性という観点から見ると、上で述べた認識系の13種33件動詞を除き、達成の自己制御性を持った動詞は20種35件、過程の自己制御性を持った動詞は3種3件で、自己制御性を持たない動詞も退屈スルなど、3種3件のみであった。インターネットで検索した結果では、自己制御性を持たない動詞が用いられている例もあったが、全体としては、認識系または何らかの自己制御性を持った動詞が多く用いられていると言えるであろう。このことから、非依頼テモラウには、無意志動詞が用いられやすいとする許の指摘は正しくないことがわかる。

テモラッテハ困ルが、ある事態に対する自らの感情の表現、あるいはその実現を制止しようとする働きかけの表現である以上、話し手にとって何らかの意味で好ましくない事態が前件に来ることは当然であるが、その好ましくない事態の半数近くが認識系の表現であること、また達成または過程の自己制御性を持った動詞が大多数であるということは、単なる非難だけではなく、認識の違いや正しくコントロールしようと思えばできないわけではない事態をコントロールしようとしなないことに対する不満や不快感、あるいはそれに対する制止を求める意図を持って使われているということになる。

さらに、三上(1972)が受身にならないものとして挙げている所動詞については、非受益テモラウで用いられる動詞の制限は受益テモラウに比べると緩やかで、似合うなど、一部の動詞は使用可能ではないかと思われるが、今回、「少納言」・名大会話コーパス及びインターネットの検索エンジンでは、この所動詞を用いた用例は観察されなかった。

一方、ラレル系については、動詞の異なり数は117で、モラウ系に比べて用いられる動詞のバリエーションが多いことがわかる。このうち認識系が21種28件、自己制御性に関しては、モラウ系ほど顕著な特徴は見られなかったが、認識系を除き、達成の自己制御性を持つ動詞が72種62件、過程の自己制御性を持つ動詞が12種12件である一方で、自己制御性を持たない、非意志動詞が22種22件あったことが、モラウ系との大きな違いである。

即ち、モラウ系が正しくコントロールしようと思えばできないわけではない事態をそのようにコントロールしようとしなないことに対する不満や不快感、あるいはそれに対する中止や制止、抑制を求める意図を持って使われているのに対し、ラレル系は(27)のようにそのような用法もないわけではないが、相手に働きかけてコントロールを求めたりするというよりは、自分に降りかかってきた事態に対する不満・迷惑感の表明を意図しているという違いがここに表れている。(27)についても、ラレテハ困ルで制止を働きかけているというよりは、「早く行け」の理由付けとして用いられていると言えるであろう。

(27) なにをしている、早く行け。命を救ってもらおうというのに、ぐずぐずされては困る。†

一方(28)は、高校のPTA集会での進路指導教員の言葉である。これも、学力は最後まで伸びるので、父母は子供がやる気を失うような言葉を言わないでほしいという、抑止の機能を持って使われている。受身を用いた(29)は、不快感の表明という印象になり、そのようなインパクトが弱くなる。同じように、(30)は、殺人を犯した医師の、自分の部屋に入った上司に対する非難と制止を表している。そこに(31)のように受身を用いると、とがめている印象はあるが、今後の制止を求めるというニュアンスは感じられない。

(28) S高生はポテンシャルが高いですからね。「そんな大学、無理だ」なんて言っても
らっちゃ困るんです。(高校進路説明会)

(29) 「そんな大学、無理だ」なんて言われちゃ困るんです。(高校進路説明会)

(30) 先生、勝手に入ってもらっては困ります。(TVドラマ・相棒V)

(31) 先生、勝手に入られては困ります。

用いられている主な文法的環境を見ると、モラウ系は、困ル／困リマスという言い切りが23件、これらにネやヨのような終助詞やカラ・ケドが文末に付いたものを合わせると、39件となり、53%を占める。ノダ・ノデスやこれに終助詞が付いたものは11件、トイウ気持チなど、トイウ＋名詞が9件、ト言ッたなど、言ウ系の動詞が後続するものが6件で、言い切りやノダもしくは、それに終助詞が付き、直接聞き手に向けられる形が圧倒的に多いことがわかる。また、小説等での台詞の引用などでト言ッたなど、言ウ系動詞が後続する場合も、その台詞自体は台詞の聞き手に向けたものが多い。このことも、モラウ系の聞き手に対する働きかけ性の高さを表していると言える。トイウのない連体修飾は1件もなかった。

一方、ラレル系は、困ル・困リマスの言い切りは39件、これに終助詞が付いた例を加えると50件、カラ・ノデなどに前接して理由を表すものが22件、トイウのない連体修飾が14件、ノダやそのバリエーションが10件、ト言ッた・思ッたetc.が10件、～トイウNが4件などであった。言い切りも少なくはないが、聞き手に向けて言い切るよりは、働きかけ性を持たず、理由を表す従属節などで、ある事態についての話し手の評価を表すために用いられている例が多いことがわかる。モラウ系では、理由を表す従属節に用いられた例は1つもなかった。また、トイウのない連体修飾では、Vテモラッテハ困ルNは視点の関係がわかりにくくなるのに加え、長く、回りくどい表現となることも、ラレル系の方が好まれる一因ではないかと思われる。

④ 動作主の性質（動作主が聞き手か否か、動作主が非情物か否か）

モラウ系74件中、直接動作主である聞き手に言い切りや終助詞を加えた形で用いられている例は26件、その他、聞き手に向けて述べられている例は6件で、計32件であった。一般的な対象が動作主であるものは15例、これも含め第三者が動作主である例は42件であった。ラレル系では、直接聞き手に言い切りの形で用いられている例は31件、言い切りではないが、聞き手に向けて述べられている例は6件で、計37件、一般的な対象が動作主である例は12件、第三者が動作主である例は85件であった。

モラウ系・ラレル系の聞き手に向けて述べられている場合を χ^2 二乗検定にかけた結果、 $p<.05$ で有意差が認められた。つまり、実際の用例でも山田（2001）の指摘する通り、モラウ系はラレル系と比べて、動作主が聞き手である場合が有意に多いということである。とすると、モラウ系はラレル系に比べればまだまだ現場性を持って用いられる場合が多いということになるが、単なる感情表出というよりは、ひとまとまりで聞き手に対する働きかけとして用いられる場合が多いのではないかと思われる。

このように、モラウ系はラレル系に比べて言い切りの形で直接聞き手に向けられる発話が多い。一方のラレル系も、そのような形は少なくはないが、③でも触れたように、カラ・ノデなどに前接して、理由を表すものや連体修飾の一部になるなど、直接聞き手に向けられない用例も多い。

ただし、モラウ系はラレル系との比較では聞き手に向けられた現場性の高い用例が多いと言えるが、第三者が動作主である例も決して少なくない。山田（2001）は現場性が低く、第三者が動作主になるような用例は書き言葉に多いと述べているが、今回の調査では、このような用例が話し言葉で少なく書き言葉で多いという傾向は特に見られなかった。

動作主の表示については、動作主を明記した例はモラウ系では7件、すべて動作主が聞き手以外の場合であった。一方、ラレル系でも15件、そのうち14件が聞き手以外が動作主の場合であった。聞き手以外が動作主である場合がそれぞれ42件、97件であることを考えると、聞き手以外の第三者が動作主になる場合には動作主を表す必要性が高くなるという山田（2001）の指摘に反し、動作主が第三者であっても、文脈で理解できる場合には動作主を明記しない場合も少なくないことがわかる。

動作主のマーカ―については、モラウ系は二格2件、ガ格が3件、ハと～デモ～デモがそれぞれ1件、ラレル系では動作主が聞き手の場合の1件は二格、それ以外の動作主の場合は二格12件、ガ格とモ格がそれぞれ1件であり、数自体は多くないが、山田（2001）の指摘するとおり、二格以外で動作主を示す場合もあった。やはり、このようなテモラウは恩恵表現というよりも、テモラッテハ困ル全体でひとまとまりの表現として用いられていると言えるであろう。ラレル系にはそのような傾向は認められなかった。

動作主が非情物の例については、インターネットには（32）のような例もあったが、今回の「少納言」では用例がなかった。このインターネットの例も動作主は「名目金利が」と、ガ格になっている。また（33）（34）のように動作主が省略されている例もあった。いずれにしても、モラウ系・ラレル系ともに、テハ困ルの形では非情物が動作主である場合はそれほど多くないようであるが、用いられた場合でも、非情物は働きかけを感じることはできないので、特に両者に違いは感じられないのではないかと思われる。

（32）つまりリフレ政策がインフレの引き上げに成功するとしても、期待インフレ率が上昇し、その後、実際のインフレ率が上昇、それが名目GDPの増加と税収の大幅な増加となって財政を大きく改善するまでの間に、そう簡単に名目金利が連動して上がってもらっては困るのである。#（下線筆者）

（33）（電動パワステに）14500キロくらいで壊れてもらっちゃ困ります、こういう納得のいかない故障は国土交通省にどんどん届け出ましょう#（括弧は筆者補足）

(34) だから (PC に) 壊れてもらっちゃ困るのです (ToT) # (同上)

このように、モラウ系・ラレル系は、その働きかけ性においては違いがあるものの、ともに事態を人と人との関わりの中で捉え、その事態に対するマイナスの感情を表現することがその基本であると言えるだろう。

⑤ 困ルがタ形や第三者を主体として用いられているか否か

山田 (2001) は非恩恵を表すテモラウは現場依存性が高く、過去にして用いられることはないとしている。また、後述の三枝 (2011) の調査でも、テハとともに用いられる困ルは全てル形であり、タ形は条件節とはいっしょに用いられないと述べられている。今回の調査でも、モラウ系で (35) 「困ったけど」が1件であったが、やや不自然な使われ方であると思われる。ラレル系では、(36) 「困ったのかしら」が1件のみであった。モラウ形に限らず、ラレル形についてもタ形は多くないことがわかる。

(35) ? タイヤをあげたんだから、僕より前を走ってもらっては困ったけど、流石ですね、参りました。† (下線筆者)

(36) (関原さんは) わたしにしゃべられては困ったのかしら
たぶん、そうだろう† (括弧は筆者補足)

困ル主体が第三者である例は、モラウ系で (37) のように語りや引用的に用いている場合を除いて1件もなかったのに対し、ラレル系では、連体修飾部を除いて (36) (38) の2件、(39) のような連体修飾部では10件であった。

(37) アジアの諸国はこれ反対しているんですよ、中国でも韓国でも こういう軍事的な協力をしてもらっては困ると。† (下線筆者)

(38) 「いくら従兵だって そう何回もお代わりされちゃ困るだろうからな」と言う。† (同上)

(39) (前略) 宇賀神と奥村にとって絶対に書かれては困る『あの問題』とは何か、という質問であった。† (同上)

ラレル系に関しては、前述のように山田 (2001) も (40) (41) を挙げ、ラレルの場合はタ形や第三者を主語にして用いることができると述べているが、その用法や意味については触れられていない。では、これらはどのような意味で用いられるのであろうか。また、文末のモダリティにどのような特徴があるのであろうか。

(40) あんなふうには誤解されては、困っただろうよ。(再掲。例文は山田, 2001)

(41) そんなふうには誤解されては、田中だって困るだろう。(同上)

タ形が用いられた (36) の場合、実際には「わたし」はしゃべっていないわけであるか

ら、テハは過去の事実と反する仮定ということになる。このような用法では、言い切りで用いられることはなく、カシラやダロウのような疑問や推量の表現を伴い、実際には起こらなかった過去の事態に関する反実仮想を表していることがわかる。この用法は困ル主体が話し手の場合にも用いられる。

一方、(38)のように、困ル主体が話し手以外の場合には、ある事態について、話し手が話し手以外の対象の心情を推し量る用法も可能である。この場合も(42)のように、小説の語りなど以外では言い切りでは用いにくい。

(42) いくら従兵だってそう何回もお代わりされちゃ困る。

これらのいずれの用法の場合も、(43)(44)のようにテモラウでは不自然になる。

(43) ? (関原さんは) わたしにしゃべってもらっては困ったのかしら

(44) ? いくら従兵だってそう何回もお代わりしてもらっちゃ困るだろうからな。

⑥ 機能・用法

モラウ系が相手の認識に対する批判やコントロールしようと思えばコントロールできないわけではない事態をコントロールしようとしないうことに対する不満や不快感、あるいはそれに対する中止や制止、抑制を求める意図を持って使われているのに対し、ラレル系はそのような用法に加え、事態を相手に働きかけて、コントロールを求めたりするというよりは、自分に降りかかってきた事態に対する不満・迷惑感の表明を意図しているという違いがあることを考察した。

また、ラレル系は、困ッタ+カシラやダロウのような疑問や推量の表現を伴い、実際には起こらなかった事態に対する反実仮想や、困ル主体が話し手以外の場合には、実際に起こった事態について、話し手が話し手以外の対象の心情を推し量る用法があることは既に触れたとおりである。

これらに加え、モラウ系で、(45)のように、自分の秘密を打ち明ける前に相手を口止めするときに用いる用法があった。これは、山田(2001)のいう未実現の動作・行為を抑止すること意図した表現ということではあるが、単なる抑止ではなく、何か言いたいことがあり、それを口にする前に、自分の意図や前提、状況などを相手に正しく理解したり、思い出したりしてもらうための前置きの機能を持って使われていることがわかる。形としては困ル／ルンダ+ガ／ケドまたはその丁寧体で用いられることが多い。(46)のように、受身にすると相手に対する制止というニュアンスはなくなる。

(45) このことは他の人にしゃべってもらっちゃ困るんだけどね、(後略)。(映画・釣りバカ日誌)

(46) このことは他の人にしゃべられちゃ困るんだけどね、(後略)。

「少納言」やインターネットでも(47)のような用例があった。

- (47) 忘れてもらっちゃ困るが、おれはもう冷静じゃない。†
(48) ?忘れられちゃ困るが、おれはもう冷静じゃない。
(49) (前略) 気を悪くされては困るが、組合で作ってもいいと思っているんだ。†
(50) 気を悪くしてもらっては困るが、組合で作ってもいいと思っているんだ。
(51) 勘違いされちゃ困るんだけど、別に日本人がレスしてないって言ってんじゃない

(52) 勘違いしてもらっちゃ困るんだけど、別に日本人がレスしてないって言ってんじゃない

このような制止の前置きの場合、ラレテハに置き換え可能なものとそうでないものがあるが、(45)(46) シャベルや(47)(48) 忘レルのような達成や過程の自己制御性を持つ動詞は、制止という意味ではラレルへの言い換えがむずかしく、(51)(52) 気ヲ悪クスルや勘違いスルのような自己制御性のない動詞はラレルの置き換えも可能である。

一方、テモラウには、現在の事態に反する仮定をして現状を肯定する用法もあった。(53)は刑事を追い払ってくれた相手に対する事件関係者の発話である。発話の時点で刑事は既にその場を立ち去っていることから、抑止としての機能ではなく、何らかの働きかけの下に実現した現実とは反対の事態をマイナス評価の形で述べて、現実を肯定する用法であることがわかる。その背景には、事態をコントロール可能なものと捉え、その事態の出現に関わった対象に対する肯定的な評価がある。(54)のように受身にすると、何らかの働きかけがあったというニュアンスはなくなるであろう。

- (53) 我々も警察にいてもらっては困りますからね。(TVドラマ・ハンチョウ5)
(54) 我々も警察にいられては困りますからね。

また、(55)では、Vテサシアゲルという謙譲語が用いられ、動作主を上位に待遇しているが、そのような上位に待遇すべき動作主で、且つ、動作主が聞き手でなく、働きかけ性もないような例では、明らかに迷惑感の伴うラレル系(56)よりもモラウ系(55)のほうが待遇的な意味で好まれる場合もあるようだ。

- (55) これからの一時間、先生には退屈してもらっては困るので、(中略) 買ってさしあげる。† (下線筆者)
(56) これからの一時間、先生には退屈されては困るので、(中略) 買ってさしあげる。

⑦ 共起するマイナスの感情・評価の表現

表2のように、モラウ系に関しては、インターネットではマズイ、迷惑ダ／スル、互イノタメニナラナイなどのバリエーションが少数あったが、「少納言」や名大会話コーパスには迷惑ダが3件のみで、ほとんどの場合、困ルが後接していることがわかる。これに対し、ラレル系に関しては、ラレテハタマラナイやタマツタモノデハナイ等のバリエーションが62件、ラレテハカナワナイやそのバリエーションが49件、ラレテハマズイが20件、ラレ

テハタイヘンダ10件、迷惑ダ／スルが9件など、モラウ系に比べ、困ル以外にも多く用いられていることがわかる。～モ水ノ泡ダ、一大事ダのようなバリエーションも見られた。やはりこちらでもラレテハ困ルが一番多く用いられる形ではあるが、テモラウほど困ルとひとまとまりの表現として固定された使われ方ではないことがわかる。

表2. モラウ系・ラレル系で用いられる主な文末^{注11}

	困る	たまらない	かなわない	まずい	たいへんだ	迷惑だ／する
モラウ系	74	0	0	0	0	3
ラレル系	133	62	49	20	10	9

モラウ系が困ルとより強い結び付きを持っていると言えるが、それでは、不都合を表す多くの表現の中で、困ルがテモラウと多く用いられているのはなぜであろうか。この点を次節で考察する。

4. 困ルについて

困ルは感情を表す動詞の1つであるが、山岡（2000）はこれらの感情動詞をさらに細かく分類し、そのル形である困ルは情意表出動詞文、タ形である困ッタは情意変化文に用いられると分析している。また、金水（2000）は、困ルは、しばしば条件節とともに用いられることから「法則的・一般的情報」として述べられる傾向が強く、困ッタは既に当該の感情が生じた後の段階に今あることを述べる、パーフェクト的な表現であるとしている。

三枝（2011）は、こうした先行研究を踏まえて「困る」の話し言葉の用例にあたり、ル形で用いられる場合が6割、またその半数が「と・たら・ば」や「ては」「ても」など、何らかの条件を表す文で用いられていることを明らかにしている。さらに、三枝は、従来、感情を表す動詞の現在形は話し手の発話時の感情を表すとされてきたが、条件文で使われる困ルに関しては、ル形は話し手の気持ちではなく、むしろ一般的な事実を表し、現実的なテンス性は示されないと指摘する。一方困ッタは、条件文とは用いられず、主節なしに独立した形で使われることが多く、困ル感情が始まったという完了を示す、個人的な感情の吐露の表現であるとしている。

また、本来困ルは、～ハ（ガ） ～ニ 困ルというように、感情の誘因を表す補語をとる動詞であるが、三枝の調査では、(57) のように、感情を誘発する対象をハ・ガ・モなどによって取り立て、題目－解説の形で用いられる場合が多いことから、動詞文ではあるが、形容詞文に近い性質を持っていると指摘する。これに対し、困ッタは感じる主体が明示され、話し手の個人的感情が示される場合が多いという。

(57) これだからこうさあ、何、お坊ちゃん育ちの人は困るよね。(例文、下線は三枝)

そして、(58) のように、困ッタよりも困ルの方が、非難されているような印象が強いのは、個人的感情を表す困ッタよりは、誰もが認識するはずの一般的原理と捉えているこ

とを示す困ルのほうが、結果的に相手の非を強調することになるためであると三枝は考察する。

(58) 上司：資料は？

部下：それがプリンターの調子が悪くて、まだ印刷できてないんです。

上司：{困る・困った} なあ、時間がないんだ。(例文は、三枝)

確かに、ル形のほうがタ形よりも非難されている印象が強いことは間違いない。しかし、一般的原理と捉えることが非難をより強調するという分析は妥当であろうか。Brown & Levinson (1987) の Politeness の原則によれば、私たちは、普遍的な人間の欲求である自己の領域と自己の行動の自由を守りたいという欲求、即ち negative face (以下、NF) が脅かされる可能性があるとき、円滑な対人関係維持のためにその行為の侵害度の程度 (Weightiness of FTA^{注12}、以下 W) に応じ、それを軽減 (redress) する negative politeness (以下、NP) というストラテジーを選択するとされる。NP には、「距離を置け」、「聞き手の領域に踏み込まず／決定権を与えよ」など、聞き手に決定権を持たせる言語行動の選択などがあるが、そのストラテジーの一つとして、「FTA を一般的規則として述べよ (State the FTA as a general rule.)」がある。即ち、(59) のように、FTA を一般的社会規則・規制あるいは義務の例であると述べる方法である。

(59) I'm sorry, but late-comers cannot be seated till the next interval. (例文は Brown & Levinson)

同じように、タバコを吸っている人に、吸うのをやめてもらうよう注意するのは相手の NF を傷つける可能性が高い行為であるが、この場合も、(60) のように個別のこととして相手の行為に触れるよりは、(61) のように一般的なルールとして述べたほうが、相手の NF に対する侵害度 W は低くなることになる。

(60) この部屋でタバコを吸わないでください。

(61) この部屋は禁煙となっております。

しかし、三枝らの指摘はこの原則とは逆である。とすると、そもそも困ルのル形が一般的原理を表すのかどうかということが問題になる。確かに困ッタはある個別の事態に対する話し手の感情を表す。一方、(62) のように、形容詞的に使われている困ルはある対象が常に我々の困ルという感情を引き起こすという意味で、その対象の恒常的な性質、一般的原理を表していると言えるが、同じル形であっても、(63) のように、目の前で生じた特定の事態に対し、直接特定の当事者に向けられた表現である場合には、困ルは、あくまである対象に対する直接的な非難という個別の事態に対する話し手の感情の表明であり、一般的な原理を表しているとはいえない。

(62) これだからこうさあ、何、お坊ちゃん育ちの人は困るよね。(再掲。例文、下線は三枝)

(63) 〈レストランで〉

従業員：すみません、皿を割ってしまいました。

店 員：え、{困るよ・困ったなあ}、あれ高いんだ。(例文は、三枝)

それでは、なぜ困ルと困ッたに、そのようなニュアンスの違いが生ずるのであろうか。困ッたは、規定の事実に対して既に引き起こされた話し手の感情の表現であるため、基本的には話し手にとどまっています、それ自体は相手に対する働きかけを持たない。一方、困ルは、事態をまだ完了していないもの、それ故制止できるもの、変えられるものと捉え、それに向かって働きかけていく表現であることにその違いがあるのではないと思われる。とすると、(63)のように、一度割れてしまった皿を割れていない状態に戻すことができない場合は一見これにあてはまらないように思われるが、このような場合は、今後割らないように気をつけるようにという、警告ともなる。即ち、困ルは、まだ起こってない、それ故抑止できる事態であれば制止を、もう起きてしまった事態であれば今後そういう事態が起らないよう相手に働きかける機能を持っていることになる。

特に、テモラッテハ困ルは、ある事態を積極的に自分と関わりを持たせる表現であるから、一層話し手の強い非難と働きかけが込められていると言えよう。その意味では、一般的原理として述べる場合であっても、それが当事者に対して用いられるのであれば、かなり直接的な表現になると言えるであろう。

さらに、終助詞との関係を見てみたい。三枝は終助詞については言及していないが、タ形ではなく、困ルでなければならない例として(64)を挙げている。(65)のように、{そんなこと急に言われても}を除いて困ルにしてみた場合、ル形ではヨ・ネ・ナどれも可能であるのに対し、タ形の場合、独話的な用法であるナは問題ないが、ネを用いると相手に何か解決法を求めているような印象になり、このような状況では不自然である。ヨは用いることができない。これも、困ッたが、個人的な感情の吐露であり、基本的には話し手にとどまっているためであると思われる。

(64) 〈アルバイト先で〉

店員：明日休ませてもらいたいんですが。

店長：え、そんなこと急に言われても {困る・*困った} よ。(例文は三枝)

(65) 店員：明日休ませてもらいたいんですが。

店長：え、{困る・*困った} よ／{困る・?困った} ね／困る・困った } な。

このように考えると、困ルは、(66)のように、テモラッテハを伴わなくても、単独で相手に対する静止の機能を持っているのではないと思われる。

(66) お客さん、困ります。

今回の用例でも、モラウ系は困ル以外と結び付くことは少なかったが、ラレル系はタマラナイ・カナワナイ・マズイ・タイヘンダ・迷惑ダやそのバリエーションとも用いられることがわかった。しかし、(67) から (73) のように、困ル以外は単独で用いられると、相手に制止を求めていることは伝わりにくい。マズイや迷惑ダは、ヨをつけると相手に対する制止の意味にもなりうるが、単独では、そのようには受け取られにくいであろう。

(67) ?お客さん、たまりません。

(68) ?お客さん、かないません。

(69) ?お客さん、たいへんです。

(70) ?お客さん、まずいです。

(71) △お客さん、まずいですよ。

(72) ?お客さん、迷惑です。

(73) △お客さん、迷惑ですよ。

このように考えると、その事態の生起が好ましくないという感情や判断を表すさまざまな表現の中で、困ルは相手に対する非難、抑止の機能を持ち、聞き手への働きかけ性を帯びる場合があるという点で、感情を表す表現の中でも独特の振る舞いをするのがわかる。これが、困ルが現場性が強く話し手中心性を持つテモラウとの親和性が高く、テモラッテハ困ルというひとまとまりの形で多く用いられている理由であると言える。

ラレテハ困ルも、ひとまとまりの形で用いられる場合もあるが、ラレル自体は、事態が話し手のコントロールを越えた形で降り掛かってくることを表す表現であり、その事態によって引き起こされるマイナスの感情の表現にとどまる場合も多く、そのため、困ル以外のマイナスの感情表現とも多く用いられるのではないと思われる。その意味で、モラウ系ほど働きかけの表現への移行が進んでいないと言えるであろう。同じように、事態が好ましくないことを表す他の感情表出表現には、聞き手に働きかけて事態の生起を阻止するような機能を担った表現に対する移行は見られないことがわかった。

5. おわりに

本稿では、コーパスやインターネットなど、実際の使用例を用いて、マイナスの感情・評価に先立つテモラウと受身の意味・用法の違いを、用いられる動詞の性質や動作主、機能などから考察した。その結果、テモラウよりも、受身、特に間接受身とともに用いられることが多いこと、テモラウは直接聞き手に向けて使われる場合が多く、認識を表す動詞や自己制御性のある動詞とともに用いられ、相手の認識に対する批判や、コントロールしようとするればできる事態に対し、コントロールしようとしないことに対する非難や抑止を表す場合が多いことが明らかになった。受身は直接受身・間接受身ともに、ある事態が自分のコントロールを越えて降りかかってくることを表す表現であるから、このように事態をコントロールできるものと捉えることがテモラウの大きな特徴であると言えるであろう。

一方受身は、間接受身が多く用いられ、一方的に降りかかってくるコントロールできない事態に対するマイナスの感情を表現する場合が多く、直接行き手に向けられた発話だけ

でなく、連体修飾や理由を表す副詞節で用いられるなど、働きかけ性を持たない用法が多数見られた。

また、テモラウには、迷惑感を和らげる待遇的な配慮に加え、次に述べることについての前置きとして用いられる機能、一方受身には過去の事態に関する反実仮想の用法などが観察された。

さらに、困ッたに比べて困ルがより非難の度合いが強いことに関しては、困ッたが話し手の感情の表現として、基本的に話し手に留まるのに対し、困ルは単独でも相手に対する非難や抑止の働きかけの機能を持つためであることがわかった。テモラウが困ルと一体となって用いられる場合が非常に多いのは、このように困ルが単なる感情表現に留まらず抑止の機能も持つため、同じ抑止の働きかけ性を持つテモラウと親和性が高いことによるものであることも明らかになった。一方、受身は働きかけのない、他のマイナス表現とも多く用いられていることから、テモラウほどひとまとまりの働きかけの表現とはなっていないこともわかった。

ただし、今回の用例では、話し言葉・書き言葉の違いは観察されなかった。今後はさらに多くの用例、特に話し言葉を対象とした分析が必要である。さらに非受益のテモラウの他の用法についても考察し、受益・非受益も含めたテモラウの全体像を明らかにすることが筆者の今後の課題である。

【注】

- 1) 受益を表すテモラウと受身の差異については熊井（2003）・スチワロドム（2009）等の考察がある。
- 2) 許の非依頼テモラウ文は、非依頼の受益文だけでなく、山田（2001）の非受益テモラウ文も含む用語である点で、山田（2001）の非受益テモラウと異なっている。
- 3) 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」プロジェクト共同開発の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese）のデータをKOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言で利用した。
- 4) 「ては困る」及びその縮約形を用いた「ちゃ（あ）困る」も併せて検索した。
- 5) 名大会話コーパスは、科学研究費基盤研究（B）（2）「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」（平成13年度～15年度、研究代表者：大曾美恵子）の一環として作成されたもので、2名から4名の話者による約100時間の雑談を収録、文字化したデータである。
- 6) 「少納言」の用例は例文の最後に†、名大会話コーパスの用例は‡、インターネットの用例は#を付した。その他は（ ）に出典を記している。それ以外は筆者の作例である。
- 7) 山内（1997）参照。Zヲを省略しても文として成立するのは、Xがその動作を直接受けている場合であると分析されている。例えば、XガYニ顔ヲ殴ラレルは顔ヲを省略してXガYニ殴ラレルとしても文として成立する。
- 8) 間違エルと間違ウ、ヤルとスルなどは同一の動詞として扱った。「舐める」「ナメル」の

ような表記の違いも同じ動詞としてまとめた。

- 9) 協力スル、工事ヲスルのようなものはスルには含めなかった。
- 10) 用例は「その程度のをデザインといってもらっては困る」で、これも認識が違うことを表していると言える。
- 11) 困ル・タマラナイ・カナワナイ・マズイ・大変ダ・カナワナイ・迷惑ダには、「困ります」「困るよ」など、それぞれの普通体・丁寧体やそれぞれに終助詞やノダが付いたものなどのバリエーションも含んでいる。
- 12) FTAはFace Threatening Actの略で、faceを脅かすような行為を表す。

【参考文献】

- 許明子（2000）「間接受身と」『日本語教育』第105号 pp.1-10 日本語教育学会
- 金水敏（2000）「1 時の表現」（金水敏他『時・否定と取り立て』）岩波書店
- 熊井浩子（2003）「日本語受動文の迷惑性について」『静岡大学留学生センター紀要』2号 pp.25-43
- 三枝令子（2011）「感情を表す動詞「困る」が示すテンス・アスペクト」『一橋大学国際教育センター紀要』2 pp.13-22
- スチワロドム・スィリラック（2009）「受動受益的「～テモラウ」文と受身文の互換性の要因について」『学習院大学人文科学論集』XVIII pp.99-123
- 三上章（1972）『現代語法序説』くろしお出版
- 山内博之（1997）「日本語の受身文における「持ち主の受身」の位置づけについて」『日本語教育』92号 pp.119-130
- 山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 山田敏弘（1999）「テモラウ受益文の働きかけ性をめぐって」『阪大日本語研究』11 大阪大学 pp.37-57
- （2001）「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第10回 非恩恵型テモラウ」『日本語学』Vol.20-9 pp.92-101, 明治書院
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) Politeness: Some Universals in Language Usage: Cambridge University Press.

On V-*temorattewa komaru*
– through the Comparison of Non-benefactive Usage of V-*temorau*
and Passive V-*rareru*

KUMAI, Hiroko

In this paper, the author discusses the meanings and functions of V-*temorattewa komaru* and V-*raretewa komaru*, analyzing the self-controllability of the verbs used along with these constructions, forms, types of the subjects of *komaru*, and so on. As a result, it is found that *temorau* is often used with cognitive verbs or self-controllable verbs and expresses disapproval of someone's cognition, or reproach for not properly controlling the controllable event denoted in the first component of the constructions, or repression of that event. Regarding the passive forms, the indirect passive is more often used than the direct passive and the usage which has no causativity and expresses negative feelings toward the non-controllable events is frequently observed. In addition, V-*temorattewa komaru* has a usage as a precaution before the statement as well as a politeness strategy mitigating the adversative sense while V-*raretewa komaru* has a usage of counter-factuality about the past event. Besides, the emotional verb, *komaru* itself has a function of disapproval and repression toward the listener, which is a reason non-benefactive -*temorau* is mainly used with *komaru* as a sentence pattern. On the other hand, -*rareru* can be used with other verbs and adjectives which express negative feelings. This is evidence that V-*raretewa komaru* is not yet transferred to an expression of causativity.

